



なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



No.3

グループ学習・議論の仕方と作文の書き方

(1) 「グループ学習の仕方」と「作文の書き方」

1年生の終わりに「歴史の授業に関するアンケート調査」をしました。みんな、とても真面目に答えてくれました。そのアンケート調査の中で、「グループ学習をもっとしたかった」「作文の書き方を教えて欲しい」の意見がとても気になりました。

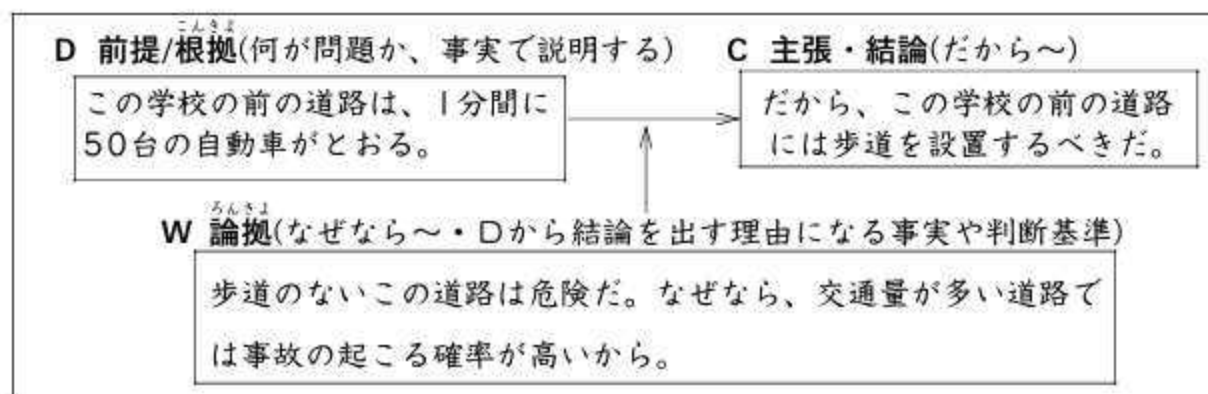
私(倉橋)も、グループ学習を増やしたかったのですが、どうしても授業時間数と学習内容の調整を取ることが難しく、1学期に5回しただけで終わってしまいました。

そこで、2年生の公民的分野での学習では、学習内容をぎりぎりまで絞り込んで、グループ学習の時間を可能な限り確保していこうと考えています。

さて、「作文の書き方」は、グループ学習や学級全体での議論に「意識的」に参加すると自然に鍛えられます。つまり、実は「作文の書き方」と「議論の仕方」は同じなのです。作文でも、議論でも、自分の意見を伝える相手がいます。その相手は、自分と違う意見を持っている可能性があります。ですから、どちらの場合も、説得力のある説明をする必要があることで共通します。これは「単語を覚えるだけの勉強」では、とうてい太刀打ちできない、思考力・判断力・表現力の少し高度な学力です。

そこで、この「なんでやねん」では、作文を書く際と、グループ学習や全体学習に参加する際に必要となる「議論の仕方」を説明しておきます。

(2) 「議論の仕方」の基本的な図式を知っておこう



上の図式は「トゥールミンの議論モデル」の最も基本的な図式です。この図式はイギリスの哲学者スティーブン・トゥールミン氏が提唱したものです。「議論の仕方」

ルール」として世界的に知られています。科学的な思考方法の図式化を可能にする方法なので、日本でも多くの学校の社会科(特に、公民)の授業で利用されています。

基本的に、グループ学習で他の人に自分の意見を説明するときや、作文を書くときには、この図式を使って、D(前提になる事実と問題) → W(論拠・理由) → C(主張)の順に説明すれば、事実に基づいた筋道の通った説明になります。

この例では、「この学校の前の道路は、1分間に50台の自動車が通ります。歩道のない道路は危険です。なぜなら、交通量の多い道路では事故の起こる確率が高いからです。ですから、この学校の前の道路には歩道を設置するべきです。」となります。

なお、一般に、議論は、事実に存在する問題点を具体的に取り上げて、その問題の解決方法の妥当性などを理由にしながら、自分の主張の筋道が通っていることを説明します。これらの一連の流れを論証と言います。

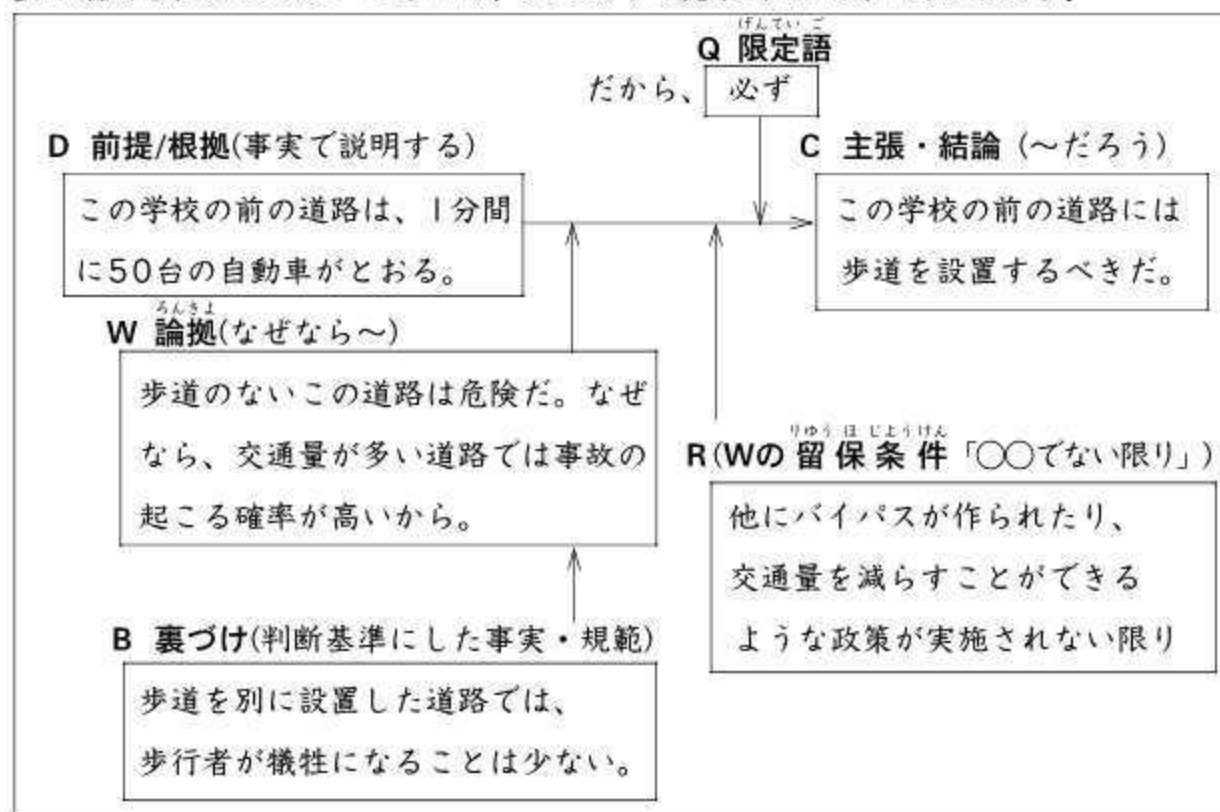
議論は、この論証を基礎単位として成り立ちます¹⁾。反対に言うと、論証のない説明は「議論」ではないと言えます。

【トールミンの議論モデルの要素】

- C (claim) … 主張、結論
- D (data) … Cを支える事実、根拠
- W (warrants) … DからCを結論づける理由づけ
- B (backing) … Wを権威づける裏づけ
- Q (qualifier) … Wの確かさの程度を示す限定句
- R (rebuttal) … Wの留保条件、例外

(3) 「議論の仕方」の発展的な図式を知っておこう

「基本的な図式」では問題解決の「議論」にたどり着けないこともあります。たいていの社会的な問題は様々な条件が複雑に絡み合っています。そこで、より慎重に議論を組み立てたいときには、次のような発展的な図式が使われます。



*1 福澤一吉『新版 議論のレッスン』NHK出版新書 2018年 p.79。